

一般相対論的量子論の完成

清水 哲男 (Tetsuo Shimizu)

量子論から一般相対論を公理的に導出することに成功した。以下に、その公理的証明の概略を述べる。量子の波長程度の「長さ」を生成する「積分演算子: d_x 」と、その「長さ」を消滅させる「微分演算子: ∂_x 」を使い、量子の基底状態: P_x を、

$$P_x \triangleq \begin{pmatrix} \partial_x \\ d_x \end{pmatrix}, [\partial_x, d_x] = 1, \text{ (後出の, 量子の励起状態: } {}^\mu D_x \triangleq \begin{pmatrix} \mu d_x \\ -\partial_x / \mu \end{pmatrix}, [\mu d_x, -\partial_x / \mu] = 1, \text{)}$$

と定義する。量子状態: P_x には「対称クロス積: $S_x \triangleq P_x \otimes_S P_x \triangleq (\partial_x d_x + d_x \partial_x) / 2$ 」, 「反対称クロス積: $A_x \triangleq P_x \otimes_A P_x \triangleq (\partial_x d_x - d_x \partial_x) / 2 = 1/2$ 」および「自乗: P_x^2 」が定義でき、

$$(P_x \otimes_S P_x) \otimes_A P_x \triangleq \begin{pmatrix} [\partial_x, S_x] \\ [S_x, d_x] \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} [\partial_x^2 / 2, d_x] \\ [\partial_x, d_x^2 / 2] \end{pmatrix} \triangleq D(P_x) P_x^2 / 2 = \{P_x \otimes_A P_x, P_x\} = P_x$$

という「自己回帰的・恒等式列」が成立している。量子状態: P_x を一般的な量子状態: P'_x に変換する「アフィン行列: $G: P_x \rightarrow P'_x$ 」は、 $G \in SL(2, \mathbb{C})$ (ローレンツ群の開被覆群)

であり、「一般的な量子状態: $P'_x = P_x(\theta) \triangleq P_x \cos \theta + {}^\mu D_x \sin \theta$ 」であり、行列: G に対応する「ゲージ変換演算子: $G_x(\theta) = P_x \otimes_S P_x(\theta) = S_x \cos \theta + {}^\mu H_x \sin \theta$ 」は、「一般相

対論的・往復運動: $P_x \xleftarrow{G_x(\theta)=P_x \otimes_S P_x(\theta)} P_x(\theta) \rightarrow P_x$ 」を発生させている。ここで登場する「ハ

ミルトニアン: ${}^\mu H_x \triangleq P_x \otimes_S {}^\mu D_x = -(\partial_x^2 / 2) / \mu + \mu(d_x / 2)$ 」は、「量子の『長さ』状態:

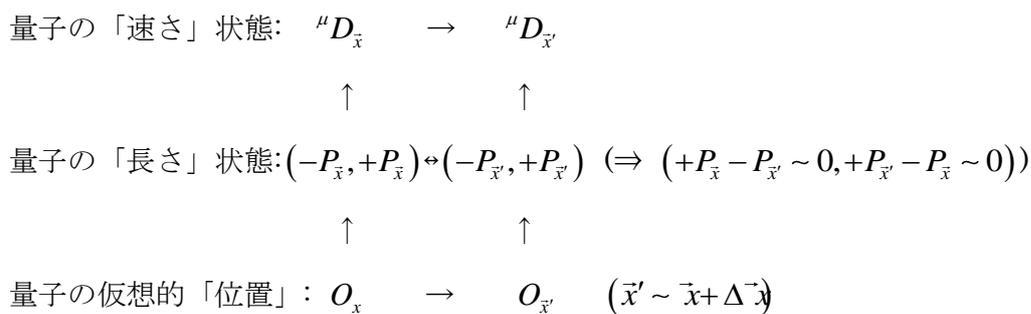
$P_x \xleftarrow{{}^\mu H_x = P_x \otimes_S {}^\mu D_x} {}^\mu D_x$: 量子の『長さ』状態」の間

に往復運動を発生させており、それは、量子それ自身が発生する「重力(引力/斥力)」によって「等価原理(重力質量: $\mu =$ 慣性質量: μ)」を充たす往復運動を行う「ガリレイの振子」がもつべきものに他ならない。「量子論の公理: $[\partial_x, d_x] = 1$ 」を充たすあらゆる量子状態が「一般相対論的・往復

運動」を行っていることが証明でき、「量子論から一般相対論的・運動論が『公理的に』導出できた」のであるから、ここに「一般相対論的量子論」が完成する。この公理的体系は、全ての演算子が内部生成されているから「自己完結的」でもある。

さらに、一般 n 次元の量子状態: $P_{\vec{x}}$ を、「パウリの復素多重スピン行列から生成されるクリフォード代数システム: $(\sigma_{x_1}, \sigma_{x_2}, \dots, \sigma_{x_n}), \{\sigma_{x_i}, \sigma_{x_j}\} / 2 = \delta_{ij}$ 」を方向単位とするベクトル形式: $P_{\vec{x}} \triangleq \sum_i \sigma_i P_{x_i}$ で定義すると、(1次元量子状態: P_x の場合と全く同様に、) $(P_{\vec{x}} \otimes_S P_{\vec{x}}) \odot_A P_{\vec{x}} = D(P_{\vec{x}}) P_{\vec{x}}^2 / 2 = \{P_{\vec{x}} \otimes_A P_{\vec{x}}, P_{\vec{x}}\} = P_{\vec{x}}$ という「自己回帰的・恒等式列」が成立し、「一般的な量子状態: $P_{\vec{x}}' = P_{\vec{x}}(\theta) \triangleq P_{\vec{x}} \cos \theta + {}^u D_{\vec{x}} \sin \theta$ 」であり、自己内生成された「ゲージ変換演算子: $G_{\vec{x}}(\theta) = P_{\vec{x}} \otimes_S P_{\vec{x}}' = P_{\vec{x}} \otimes_S P_{\vec{x}}(\theta) = S_{\vec{x}} \cos \theta + H_{\vec{x}} \sin \theta$ 」による、 $P_{\vec{x}} \xleftarrow{G_{\vec{x}}(\theta) = P_{\vec{x}} \otimes_S P_{\vec{x}}(\theta)} P_{\vec{x}}(\theta)$ という「等価原理(慣性質量=重力質量)」を充たす「一般相対論的・往復運動」が行われていることが証明できる。つまり、任意の n 次元量子状態においても、量子論から一般相対論が「公理的に」導出できる。

$P_{\vec{x}}$ は量子の n 次元「長さ」状態に、 ${}^u D_{\vec{x}}$ は量子の n 次元「速さ」状態に、それぞれ対応させることができ、 $(-P_{\vec{x}}, +P_{\vec{x}})$ は、量子論的に結合し接続されることによって n 次元ユークリッド空間を構成し、 ${}^u D_{\vec{x}}$ は、量子の接続によって構成された n 次元ユークリッド空間の上を、「量子の波長: $\Delta \vec{x}$ 」を単位として「尺取り虫的に・前進」運動する。その様子を直観的に図示すると、次のようになる。



量子の「長さ」状態: $P_{\vec{x}}$ と「反・長さ」状態: $-P_{\vec{x}}$ とは、「対生成/対消滅」して「長さの・空白領域」を作り出し、量子の「速さ」状態は、その中を「一般相対論的・慣性運動」する。「速さ」状態: ${}^u D_{\vec{x}}$ は「前進」運動を、「反・速さ」状態: $-{}^u D_{\vec{x}}$ は「後退」運動を、それぞれ行うから、量子の「正/反」は「前進/後退」運動で識別できる。